**いつもあなた方と共に 6/11/17**

**マタイ 28:16-20 スティンストラ牧師**

神の言葉を聴いて学ぶとき、その状況について注意を払うことは大切である。「どこで起こっているのか？」とか「誰がいるか？」は、与えられた聖書箇所の純粋な意味をわかるためにはとても重要な問いである。そして細かいところまで見ていくとき、多くのことを学ぶことができる。

今日の三位一体主日に与えられたような福音書箇所を聴いて学ぼうとする際、まさに状況に注意を払わなければならない。　教会に何年も来ている者にとっては聖霊降臨後の最初の主日に大宣教命令の聖書箇所を聞くのは耳慣れており、なんら特別なことは無いと感じてしまう。私たちは、イエスが復活後に何日かしてから弟子たちを集めて、父と子と聖霊の御名において洗礼を受けさせ、またイエスが命じたことに従うように教える中で、世界のすべての国々でイエスの弟子づくりをするように指示をしたということはよくわかっている。そして私たちはイエスがその派遣の儀式を、「世の終わりまでイエスが常に信じる者たちとともにいてくださる約束」の言葉をもって終えたことはわかっている。そして弟子たちはその約束の言葉をずっと大切にしてきている。また私たちは救い主の唇から出た最後の言葉をもって、マタイ福音書が終わっていることも知っている。　しかし、私はこの言葉がもっと私たちの生活に関与しているものとなるためには、さらに細かいことに注意する必要があるのではないかと思う。その細かいことの中に、神が現代を生きる信仰者である我々とも関係を欲している内容が含まれているのだと思う。

たとえば、ガリラヤ地方に行きイエスの指示された山に登ったのは11人だったことにマタイは注意を払っている部分を私は気に入っている。　私たちは、中核となっているのはもう12人ではないことを知る必要がある。ユダの裏切り行為と全員がイエスを見捨てしまった結果として、もう12弟子ではなくなっていた。しかし不完全でも残った11人で命令に従っていた。彼等はイエスの述べていた地域の指定の場所へと歩んでいった。それはイエスが宣教を開始した唯一の場所であり彼等の宣教の元祖でもある。それは偶然ということではなかった。弟子たちは山の頂きに行った、そしてその頂きとは、人類と神の領域を分けるところだった。そこには、マタイの記述によるギリシャ語の言葉によれば、信じる者と疑う者もいるなかで復活した主に出会い、驚くべき神秘を目の前にして、新しい世界と新しい時代の発端に立っているのだった。

見方によっては、今述べた事柄はむしろごく当たり前のことだ。しかし、この物語のたいしたことではないような事柄が、イエスの最初の従者たちの驚くべき霊的な体験を私たちに結びつける鍵であると私は思う。彼等が復活のイエスに出会う際にかかえていた問題だらけの状況は、実は私たちが復活の主にこの神聖なる礼拝堂で出会うときに私たちがかかえている問題とそっくりなのだ。初代の弟子たちと同じように、この礼拝堂に集まった者たちも、イエスを拝む言葉を口にするにしても神のぐらつかない愛と恵みの最高の知らせは、あまりにも都合が良すぎて真理であるとは信じきれないような人々も含まれている集まりなのだ。私たちは、希望か恐れ、信頼か疑念、成功か失敗などの相反する思いをいだきつつ、必ず新しくされる必要を感じている。もし自分たちが救いの発端になった弟子たちとともに、私たちも価値ある弟子たちなのだという確信を得るためには、私たちが始ったところに戻って来なさいという招きに応じる以外には選択は無い。

だからイエスは自分が選んだ特定の言葉を使っている 。彼は不明瞭な神の存在を明らかにする一般的な信条を我々に教えたり、あるいは三位一体を定義したりあるいは説明したりするといった、父と子と聖霊のイメージを呼び起こすようなことはしていない。　その代わり、神が存在するという良き知らせを全世界に広めるために彼の言葉で述べているだけだ。　それゆえ、我々のような民がいまここで神の国を想像できるようにしている。それは自らを顕した神がその民を慰める手段なのだ。その自らを顕した神とは、「私はある」しかも「イマニュエル（神は私たちとともに居られる）」と言う人間との約束をする力強い主である。何があろうがまたどんな状況であろうが主の御名において洗礼を受けた一人一人の神の子供たちとともにいっしょに居てくださるという約束である。　あまりにも多くの決断と行動をとらなければならず話す言葉は神の存在とは関係の無いことばかりになってしまうときにも、さらにもっとひどくて、私たちが何をしている時であろうが神がいてくださるというイエスの御言葉など聞こえてこなくなってしまい不信仰におちいってしまったときですら、主はともにいてくださる。私たちが真に生きようとするなら、その部屋にいつも父と子と聖霊なる神がいるという期待をもって生きる必要があるのだ。

ばらばらとなっている人類の真っ只中に神が存在してくださるというきわめて単純な信仰は神秘的な三位一体を説く教会があるからこそ存在している。　Anne Lamott (アルコール依存症、シングルマザー、そううつ病、キリスト教などに関する著述家)が言うように、「三位一体という難しい位格的結合までは理解する必要はなく、巨木の森林に現れる神秘的な存在に信頼して任せれば良い。」イエスが彼の教会に望んでいることは神がいつも我々とともにいるということに気がついていることだ。というのは「父と子と聖霊の御名において」という言葉が神の御国の実現にむけ堂々と行動する力と、リスクを負う勇気を与えるからだ。我々が神とともに居るという約束を真剣に受け止めて行動しはじめるとき、我々が人間同志互いに生きていこうとする生き様が変わっていくということを、神はわかっている。神が在るという前提でなされている活動ならば、隣人をケアするということに無関心になってしまうようなことはなく、また、神が我々とともにいるということを理解しているならば神が創造した世界の自然環境がそんなにでたらめになってしまうことは無いということも神はよくわかっておられる。私たちが話しそして行動することがすべて「父と子と聖霊の御名において」という言葉を持ってはじめるならば、私たちはこれまでとは異なる民となり、教会も聖なる目的を果たすことになり、そして世界に大きな違いをもたらすことになる。

だから私たちは毎週の礼拝を祝祷をもって終わり、「父と子と聖霊の御名において」洗礼を受けた私たちに、その三位一体なる神が常にいっしょにいてくださることに再び気づかされるようにしているのだと思う。　ただ、それを7日間連続して、神がいっしょにいてくださるというすばらしい知らせに集中していることは、とても難しいことだと思える。私たちが教会の駐車場からひとたび外に出ていくならば、天の父が私たちもまたこの世に存在しているすべてのものを創られ、イエスはすべての人類を見ておられて常に愛してくださっており、そして聖霊はキリストを信じる者たちにこの世におけるすべての不完全な人類への祝福となるように望んでいるという大胆な主張は、世の中の文化からは受け入れがたいものとされてしまう。　もし私たちがイエスの伝道の業に成功するチャンスがあるとするなら、私たちはどんなときにもすべての段階において主が共にいてくださるというすばらしい約束にすがりついていなければならない。　アーメン